

# 縄文時代後期堀之内1式土器の系統分析

加 納 実

## 1. はじめに

堀之内1式土器の研究は、多くの先駆の成果をふまえつつ、市立市川考古博物館開館10周年記念により開催されたシンポジウムを契機として、一層の進歩を示してきたといえよう。とりわけ、鈴木徳雄氏によって示された6類型の提示（鈴木1990）の成果を踏まえつつ、系統的分類・時間的変遷を整然と示した石井寛氏の論考（石井1993）は、今日の堀之内1式土器研究の、ひとつの到達点を示しているものといえよう。

かつて鈴木徳雄氏は「縄文後期前半の遺跡から出土する土器群を詳細に検討すると、複数の系統が混在し、あるいは複合・複雑な様相を呈していることが解る。このような上器群を擁する遺跡は、様々な土器の系統関係によって支持されつつ、その離合集散の結節点として存在しているように見える」（鈴木1984）と示した。ここに提起された視点は、やがて鈴木の型式内部の構造にみみこむ一連の研究（《例えば（鈴木1999）が代表例》）として結実していく。この鈴木論考（鈴木1999）の評価に関しては、簡単に触れたことがあるので（加納2000a）一読願いたい。

本稿は、鈴木氏の一連の論考に触発されて草稿したものである。分析の対象とする土器群を、・遺跡内から出土する土器群に限定したところで分類作業を行い、それぞれの土器間に認められる同一性および差異性を見出し、なかでも特に、その差異性の由来を把握することを主な目的としている。

分析の対象となる遺跡は、市原市武士遺跡である（加納1998）。本遺跡は堀之内1式期の住居跡約205軒・土坑約185基・埋葬約39基をはじめ、貝層中から多量の土器群が出土している。また、遺構外からも膨大な量の土器群が得られており、一遺跡内における土器群の系統性を把握するには、絶好のサンプル数を擁しているものと判断される。さらには、武士遺跡の周辺域には、菊間手水貝塚・木戸作貝塚・小金沢貝塚・西広貝塚・根田祇園原貝塚・能満上小貝塚・能満分区貝塚等、当該期に設営された多くの遺跡が存在し、縄文時代の地域社会の変遷史を解明する上で、絶好の対象となる。

## 2. 分類の基準

### (1) 群別と呼称方法

本稿での土器群の分類に関しては、石井氏の系統的把握を覗んだところでのA～F群という6分類體（石井1993）に依拠・踏襲している。しかし、石井氏の呼称方法と本稿での呼称方法

を同一の呼称方法とした場合、特に、下総地域と神奈川方面での土器群の構成比（各群の量的な比率）には顕著な差異があることから、躊躇を覚えた。そのような理由から、本稿ではA～Fという呼称方法は採用しつつも、各群の指す土器群は石井氏の論考で指す土器群とは異なることを了解していただきたい。

したがって、本稿では石井氏の分類による“群”については、例えば“石井A群”とし、本稿の“群”を、例えば“武士E群”と呼称することとした。

## (2) 群別

### 武士A群（図1～10）

本群は、石井氏がD群とした「口縁部に無文帯を有し、頸部以下に文様帯を有する網取式の器形・文様構成を採る一群」に概ね相当する群である。後述する武士D群との差異については、既に石井氏が「影響関係が顕在化し、分類に苦慮する事例がかなりの数存在するようになる」、すなわち「中間的な土器をも生み出す」（石井1993）と指摘するように、武士A群と武士D群のどちらに編入すべきか苦慮した土器群もある。これらについては後述するが、本群への編入は、事実記載を行いうえでの全く便宜的な措置であることを明記しておきたい。

### 武士B群（図11～21）

本群は石井氏によって「D群（武士A群）から口縁部無文帯を省略し、A群（武士E群類似）の口縁部を採用した形で捉えられる土器群」で、「地縞文を有する下総方面で主体となる一群」（石井1993）とされた土器群に概ね相当するものである。なお、石井A群とは「下北原式との呼称がなされている、称名寺式の特徴を良く残す一群」であり、「A群（武士E群類似）の口縁部」とは、「突起部などを起点とし、口縁部を一周する沈線」が施されるものである（石井1993）。

石井氏の把握を素直に解釈するならば、武士B群は、武士A群と称名寺式土器系譜の上器群が接触・融合することのなかから成立した上器群であると考えられる。本群が下総地域での分布が主体であり、逆に、下総地域では石井A群（称名寺式系譜の土器群）の分布が希薄である点や、共に頸部において若干の括れを有する器形であるという共通点、さらには、共にこの括れ部によって施文域が明確に分割される傾向が希薄であるという共通点等を勘案すれば、武士B群の成立に関する石井氏の想定は的確であるといえよう。

なお本稿では、武士B群を、頸部に括れ部を有する土器群（B1群 図11～16）と、括れ部を有さない土器群（B2群 図17～21）に分けている。また、石井氏の論考では本群に含まれていた「朝顔形深鉢の一部」、すなわち「垂下墜帯などが器面を区画する類」ではなく「朝顔形の器形であっても、J字文や蕨手文など単位文が採用される一群」（石井1993）は、本稿では武士C1群として、朝顔形深鉢である武士C群に編入している。

#### 武士C群（図22～30）

朝顔形を呈する深鉢で、主文様部位に垂下隆帯を有さないものを武士C1群（図22～27）、主文様部位に垂下隆帯を有するものを武士C2群（図28～30）とした。武士C2群とした土器群は、概ね石井氏のF群に相当する。当該土器群の把握は石井氏によってほぼ尽くされている。系譜に関しては、「器形・文様構成は称名寺式末期に東北地方における成立を確認できる」とし、時期的な傾向に関しては「第3段階にあっても例外的な存在」で「第4段階から第5段階における急増と多様化」が認められるとし、その要因が「単位文跡果の衰退による器面の画一化の趨勢のなかで理解できる」とした点である（石井1993）。

繰り返しになるが、石井氏の論考では石井氏のB群に含まれていた「朝顔形深鉢の一部」、すなわち、「垂下隆帯などが器面を区画」することのない「朝顔形の器形であっても、」字文や廻手文など単位文が採用される一群（石井1993）については、本稿では武士C1群として、朝顔形深鉢である武士C群に編入している。

#### 武士D群（図31）

石井氏が「口縁部から頸部屈曲部にかけてを無文帯とし、以下を主要文様帯とした一群」とした土器群で、石井氏のC群（石井1993）に概ね相当する。武士遺跡を含めた下総地域での出土例は、神奈川方面に比して、著しく劣る土器群である。これらの土器群のうち、石井氏が「横帯文を有する一群」とした石井氏のCⅢ群（石井1993）については、武士遺跡での明確な例は欠ける。

#### 武士E群（図32-1～4）

石井氏が「称名寺式土器の文様構成を引き継ぐ一群」とした土器群で、石井氏のA群（石井1993）に概ね相当する。これについては、武士D群同様、武士遺跡を含めた下総地域での出土例が、神奈川方面に比して、著しく劣る土器群である。

#### 武士F群（図32-5・6）

石井氏が「複数沈線により懸垂文を表現し、それを斜位に連絡する斜行文を組み合わせる一群」とした土器群（石井1993）で、石井氏のB群に概ね相当する。武士D・E群同様、武士遺跡を含めた下総地域での出土例は、神奈川方面に比して、著しく劣る土器群である。石井氏が、石井氏のD群（武士B群）を「関東西部のB群」に対応する土器群として捉えた（石井1993）ように、神奈川方面と東京湾を隔てた対岸の武士遺跡においてすら稀少な土器群であり、明瞭な地域性を示す土器群である。

### （3）種別・類別

群別以下の分類は、種・類となり、全体では、群-種-類という構成とした。種別と類別について、種別は主に土器の単位部に施される主文様を基準に分類したが、一部、類別での主文

様の分類をせざるを得なかつたものもある。

類別の基準については、各種ごとの様相に差異が認められたため、種ごとの様相を把握しつつ独自に説けている。

以下、これらの群－種－類の構成を示しておきたい。

#### 武士A群

##### I種　主文様が蕨手文の土器群

1類　蕨手文を單沈線のみで描出する土器群 (1-1~3)

2類　蕨手文の片側に側線が施される土器群 (1-4~2-2)

3類　蕨手文の両側に側線が施される土器群 (2-3~4-4)

##### II種　主文様が大柄のJ字文系の土器群

1類　主文様間を斜位の沈線で連携する土器群 (5-1~7)

2類　主文様が懸垂文化する土器群 (6-1~4)

##### III種　主文様が渦巻文系の土器群

1類　主文様間を斜位の沈線で連携する土器群 (7-1~7)

2類　主文様が懸垂文化する土器群 (7-8.9)

3類　主文様が渦巻文系+懸垂文構成を探る土器群 (8-1~11)

##### IV種　主文様が懸垂文構成のみの土器群 (9-1~9-10-1.2)

#### 武士B群

##### 武士B 1群　頭部に括れを有する土器群

###### I種　主文様が蕨手文の土器群

1類　主文様のみの土器群 (11-1~4)

2類　主文様+副文様という構成を探る土器群 (11-5~12-1)

###### II種　主文様が渦巻文（J字文）系の土器群 (13-1~3)

###### III種　主文様が懸垂文構成の土器群

1類　主文様が懸垂文のみの土器群 (14-1~3)

2類　主文様に弧線文が付着する土器群 (14-4~7)

###### IV種　主文様が匁字状の土器群 (15-1~7)

###### V種　主文様がY字状の土器群 (16-1~4)

##### 武士B 2群　頭部に括れを有さない土器群

###### I種　主文様が蕨手文の土器群 (17-1.2)

###### II種　主文様が大柄のJ字文系の土器群 (17-3.4)

###### III種　主文様が渦巻文系の土器群 (18-1~8)

###### IV種　主文様が懸垂文系の土器群

1類 蛇行文系の土器群 (19-1~5)

2類 懸垂文の土器群 (20-1~10・21-1,2)

#### 武士C群

武士C 1群 主文様部位に垂下降帯を有さない土器群

I種 主文様が狀手文の土器群 (22-1~4)

II種 主文様が蛇行文の土器群 (22-5~10)

III種 主文様がJ字文系の土器群 (23-1~3)

IV種 主文様が渦巻文系の土器群 (23-4~9)

V種 主文様が入組文の土器群 (23-10~14)

VI種 主文様が懸垂文の土器群 (24-1~9)

VII種 主文様が弧状の土器群 (25-1~5・26-1,2)

VIII種 主文様が三角文の土器群 (27-1~3)

武士C 2群 主文様部位に垂下降帯を有する土器群

I種 垂下降帯が1本の土器群

1類 副文様が入組文の土器群 (28-1~6)

2類 副文様が斜行文の土器群 (28-7)

3類 副文様が弧状の土器群 (28-8, 10, 11)

II種 垂下降帯が2本の土器群

1類 副文様が入組文の土器群 (29-1)

2類 副文様が斜行文の土器 (29-2, 3)

3類 副文様が弧状の土器群 (29-4)

III種 2本の垂下降帯が交差する土器群 (30-1,2)

#### 武士D群

I種 满巻文を主文様とする土器群

1類 下端の横位区画が明瞭な土器群 (31-1~3)

2類 下端の横位区画が明瞭でない土器群 (31-4~8)

II種 懸垂文を主文様とする土器群 (31-9~11)

#### 武士E群 (32-1~4)

#### 武士F群 (32-5, 6)

なお、本稿では、個体数の少ない武士D・E・F群、および器形や器面上での両一化が限定された段階（石井第4・5段階）で進行するC群に関しての分析には、自ずと限界があり、紙面の都合も勘案して、詳細な分析は行なわなかった。

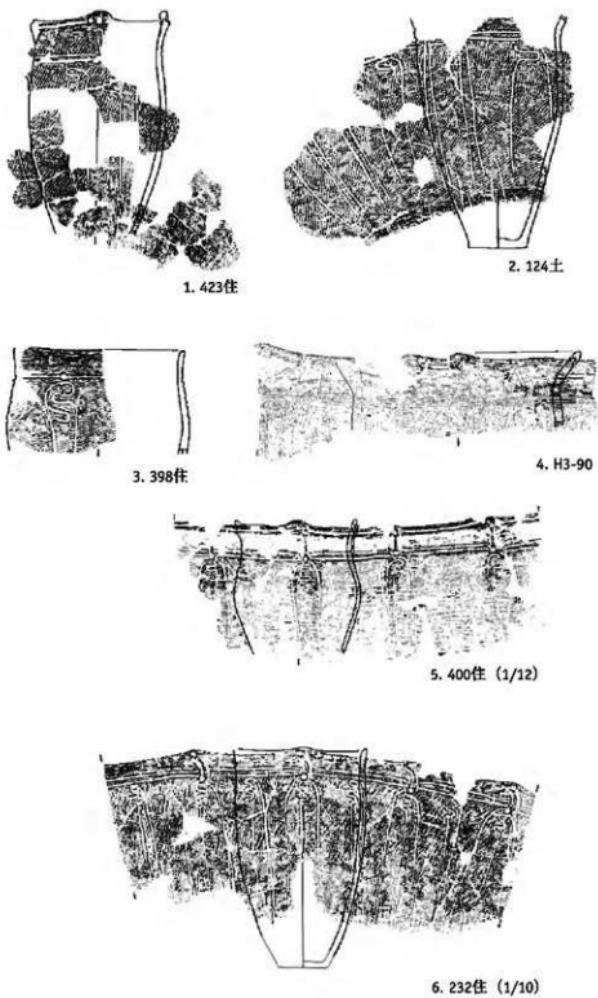


図1 武士遺跡A群土器

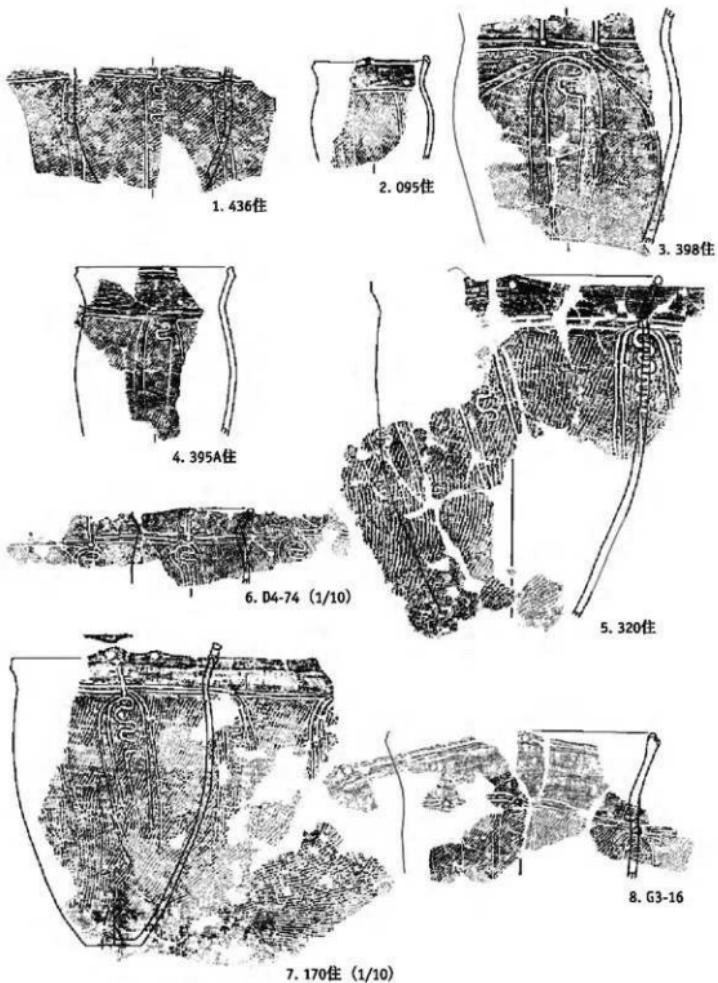


図2 武士遺跡A群土器

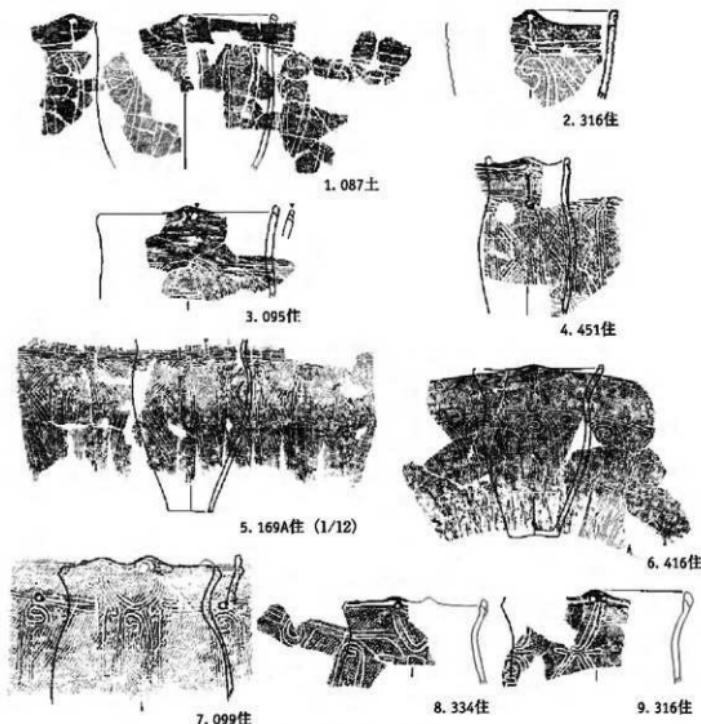


図3 武士遺跡A群土器

#### (4) 用例

分析・掲載した土器群は、主に有文精製深鉢系の土器であるが、一部に、半精製的な土器や、器高の低い鉢形・壺形の上器も含まれる。

土器の出土地点に関しては、番号の末尾に、住居跡出土のものは“住”、土坑については“土”、埋甕については“埋”と付し、遺構外出土についてはグリッド名を記しておいた。

土器の縮尺については、報告書に掲載されたものを一律に1/2に縮少している。縮尺が無記入のものについては1/8、その他は個別に付した。

本文中の土器の指示は、例えば図1-1の場合、“1-1”のように記し、連続して指示する

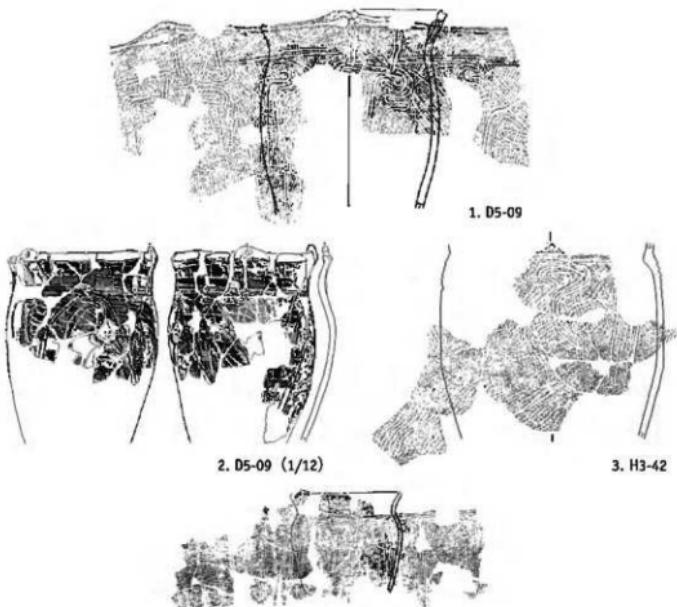


図4 武士遺跡A群土器

場合は“1-1～6”のように記し、図版をまたぐ場合も“1-6～2-4”というような措置をとった。

図版の作成に際して、単独の図版中に、単独の群・種・類のすべてがおさまるものと、複数の図版にまたがるものがあるが、これについては土器群の数量を勘案しつつ、任意に図版を組んだ結果であり、特別な意図はない。また、図版中の個々の土器の配列については、分類・解説に際しての便宜を優先させており、時間的傾斜を示す意図は第一義的には排除している。

各類としての分類の基準については、時間的序列の単位として、0群0種0類としたものが、縮年表に縮み込まれるような分類ではない。また、後述する集団的な意味合いからも、一部、称名寺式期・堀之内2式廟の上器群も併せて掲載している。

最後に、図版中の土器群については、極力その解説に務めてはいるが、解説のなされない土器群や、群別・種別・類別から勘案して、当該図版中への編入に疑問が残る土器群が存在する。これについては、本稿が、武士遺跡出土の堀之内1式土器群の系統分析をおこなう論考である

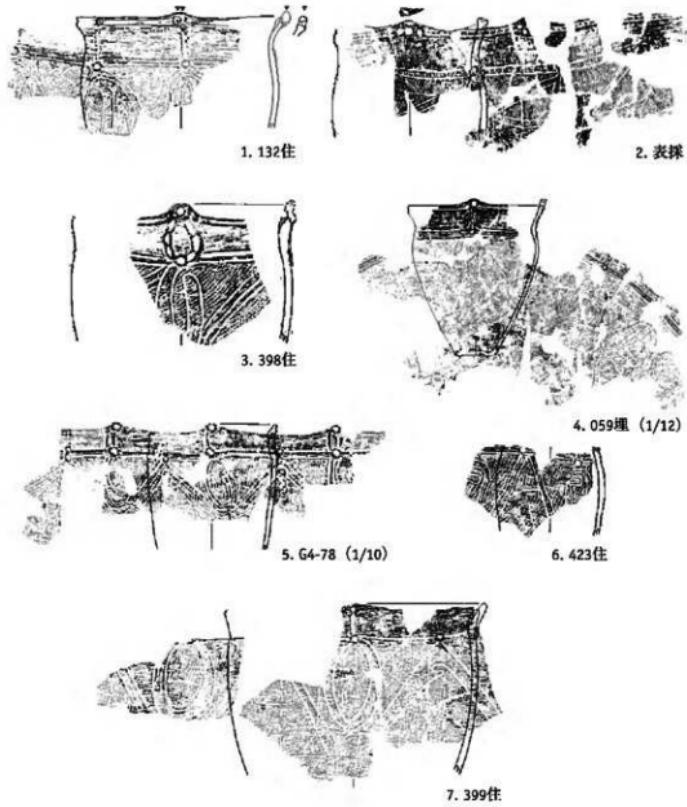


図5 武士遺跡A群土器

と同時に、膨大な量におよぶこれらの完形土器・復元実測土器の網羅・集成をはかり、研究者への便宜に供するという、資料提供者としての責務の遂行の一端をも目論んでいる所以であることを明記しておきたい。

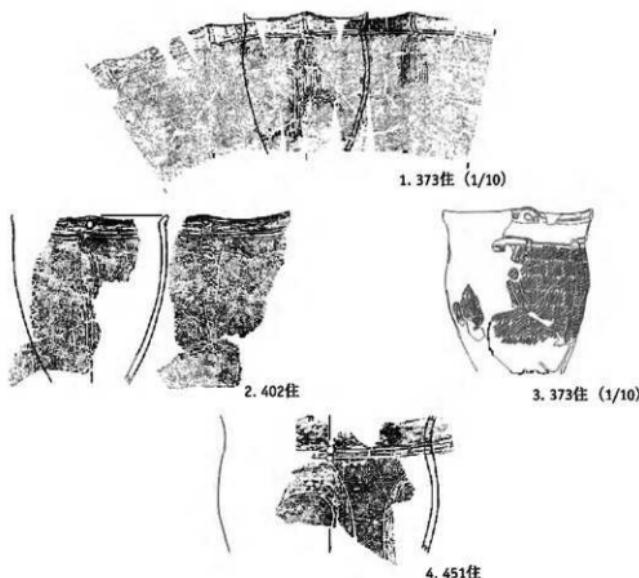


図 6 武士遺跡A群土器

### 3. 分類の実際と土器説明

#### (1) 武士A群

##### 1種 主文様が庶手文の土器群

###### 1類 庶手文を単沈線のみで描出す土器群 (1-1~3)

全体の構成を窺い知ることのできる土器に乏しいが、主文様が單位部（土器の突起・把手部）に施されるもの（1-3）と、單位部に施されないもの（1-1）に分けることができる。1-2は、頸部括れ部に施される横位の区画文をまたぐように施される後述の3類の主文様と、横位区画文下に納まる1類の副文様という組合せの可能性が高いが、破片のため判然としない。また、1-3については、本来的には武士A群に含まれるとは言い難いものの、便宜的に本群に含めている。

###### 2類 庶手文の片側に側線が施される土器群 (1-4~2-2)

主文様のみの土器 (1-5) と、主文様間に副文様が施されるもの (1-6-2-1) に分けることが

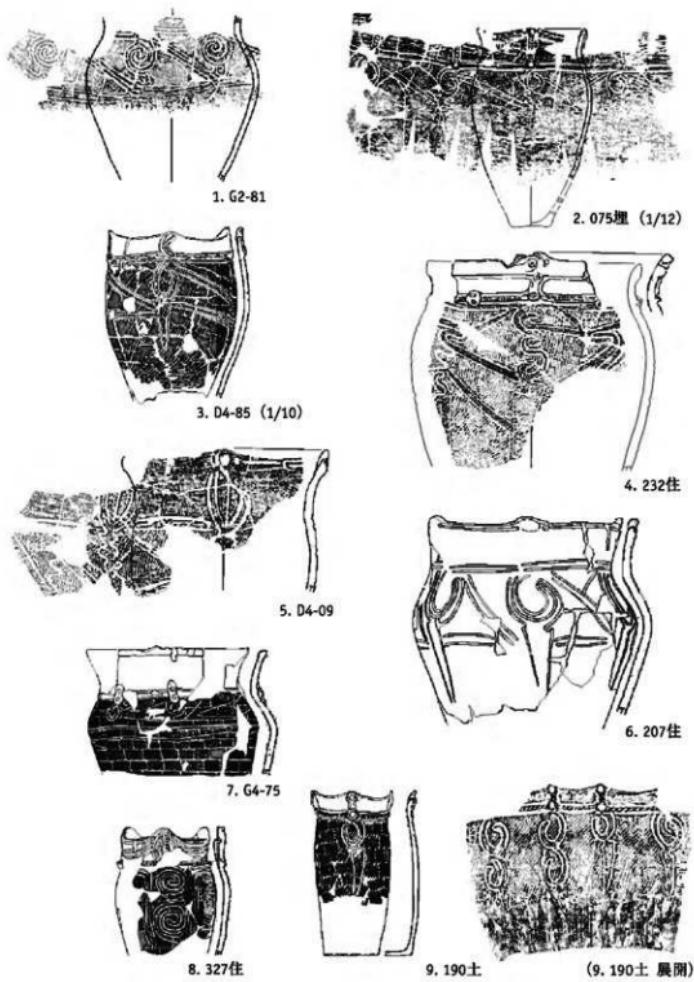


図7 武士遺跡A群土器

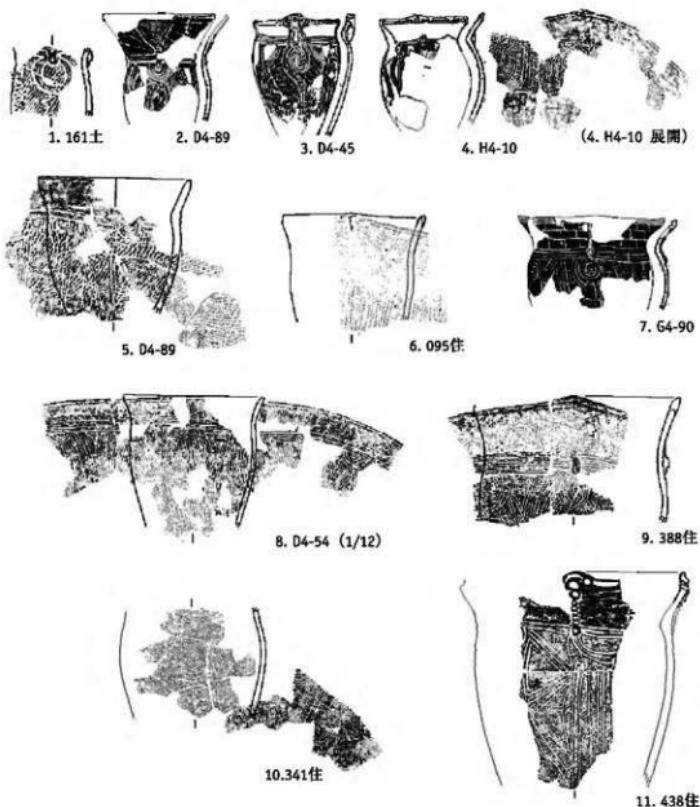


図8 武士遺跡A群土器

できる。この場合の副文様は、1類とした側線の施されない蕨手文である。

3類 蕨手文の両側に側線が施される土器群 (2-3~4-4)

蕨手文と側線を無文とするもの (2-3-4) があり、蕨手文が頸部括れ部の横位の区画文から独立している土器 (2-3) と、依存・付着している土器 (2-4) に分かれる。

蕨手文の主文様のみの上器 (2-4.6.7) と、蕨手文の副文様を有する土器 (2-8-3-1) があり、

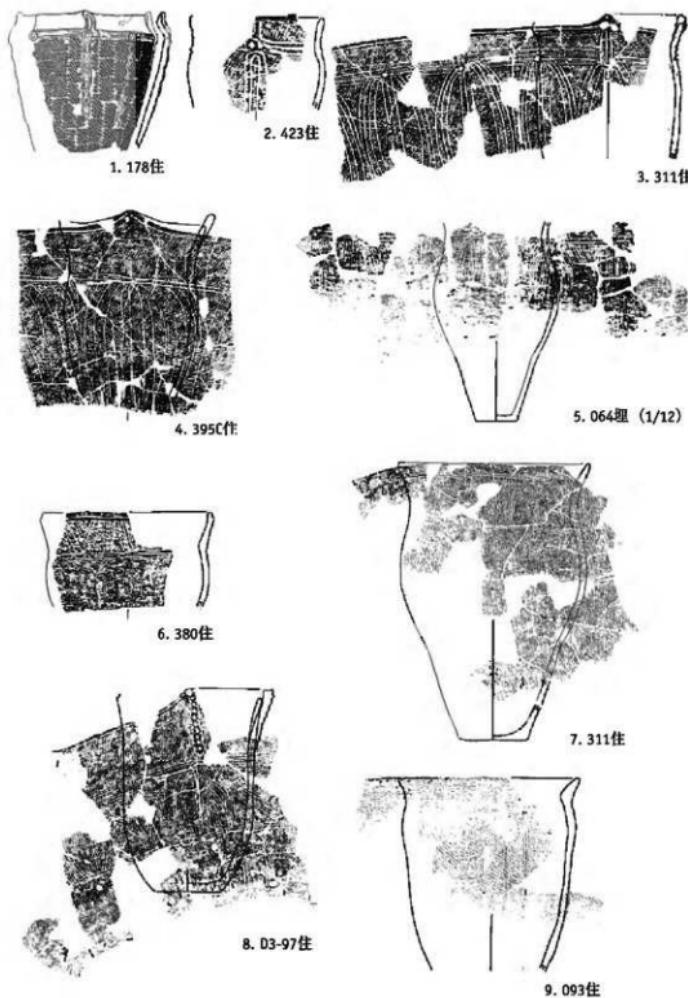


図9 武士遺跡A群土器



図10 武士遺跡A群土器

この場合の副文様は、2類とした片側に側線が施される土器（2-8）と、主文様の繰り返しとなる土器（3-1）に分かれる。

主文様間に沈線が施される土器（2-3・3-2～5）があり、主文様間の沈線が、主文様相互の横位の連携を図るような土器（2-3）と、主文様間の空隙を埋める懸垂文系の斜行文である土器（3-4.5）と、両者の中間的な土器（3-2.3）に分かれる。

3-7～9は口縁部のV字状の意匠と肩部の蕨手文が緻密したような土器で、主文様部位で頸部括れ部の区画文が途切れる。

このほか、蕨手文が形骸化し側線が強化され、主文様を繰り返す土器（3-6）、蕨手文・斜行文を頻繁に繰り返す土器（4-1.2）などがある。

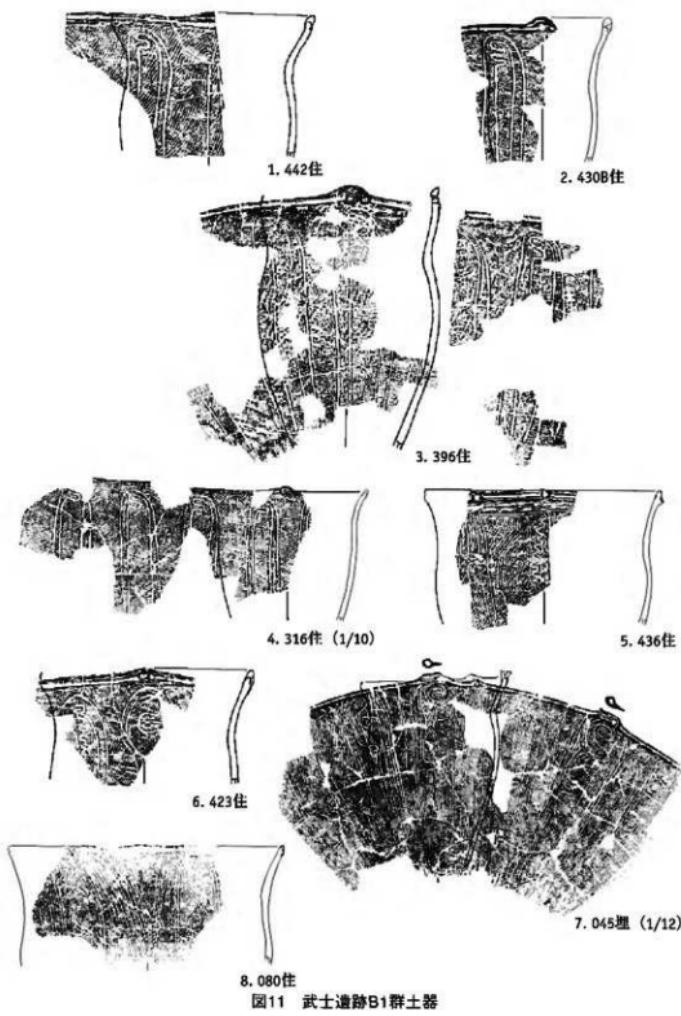
## Ⅱ種 主文様が大柄のJ字文系意匠の土器群

### 1類 主文様間に斜位の沈線で連携する土器群（5-1～7）

意匠内が無文のもの（5-1.2.7）とそうでないものに分かれる。また、斜位の連携沈線に副文様が付随するもの（5-5～7）とそうでないものに分かれる。副文様は蕨手文・蛇行懸垂文である。5-7はJ字文意匠に類似するO字状意匠を主文様とするが、剣先状意匠が付隨し、主文様の懸垂文化が認められる。副文様は、末端を解放した蕨手文と斜行文が同化したものであり、継位の列点は、蛇行文の形骸化したものなのかもしれない。5-4の副文様部位の意匠が、本来の入組文系譜の連携沈線の集合沈線化であるか、主文様の繰り返しであるのかは判然としない。

### 2類 主文様が懸垂文化する土器群（6-1～4）

J字文+剣先状意匠で、武士A群Ⅰ種2類と同様の側線が施される土器（6-1）、J字文が2段、もしくはJ字文+形骸化した剣先状意匠が施される土器（6-2）がある。副文様に注目するならば、副文様に蛇行文（6-2）・蕨手文（6-3）が施される土器と、そうでない土器に分かれる。6-3の主文様は頸部括れ部の横位区画文に依存するが、副文様の蕨手文はこの区画文をまたぐかたちで、依存の度合いは主文様に比して小さい。また、主文様の末端を横位に開放し



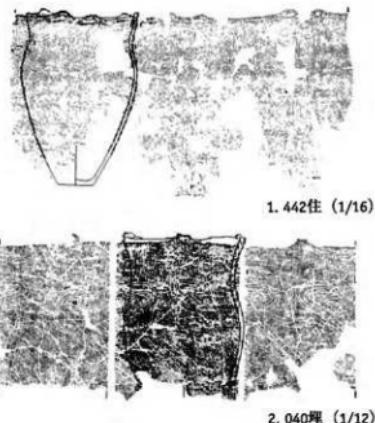


図12 武士遺跡B1群土器

て、主文様相互の横位の連携を図るが、副文様の著しい懸垂文効果に阻まれ、横位の連携、もしくは横位区画文としての完成にはほど遠い。

**Ⅲ種 主文様が渦巻文系の土器群**

**1類 主文様間を斜位の沈線で連携する土器群 (7.1~7)**

胴部文様帯下半に、主文様を横位に連携する沈線もしくは区画沈線を明確に有するもの (7.1) と、有さないもの (7.2)、両者の中間的なもの (7.3~5) と、横位の連携沈線が形態化したもの (7.6) に分かれる。主文様の渦巻文と斜行文（もしくは人組斜行文）が接着し、これらの胴部上半での意匠との依存度が希薄な横位区画文が胴部中位に施されるもの (6.7) もある。主文様の懸垂文化がなされないという点においては、武士D群的色彩を色濃く残しているものとも捉えられよう。

**2類 主文様が懸垂文化する土器群 (7.8.9)**

主文様が懸垂文化すると同時に、斜行文が認められない土器群である。

**3類 主文様が渦巻文系+懸垂文構成を探る土器群 (8.1~11)**

2類で確認された懸垂文化が、主文様+懸垂文というかたちで安定する土器群である。

**IV種 主文様が懸垂文構成のみの土器群 (9.1~9・10.1.2)**

懸垂文と両脇の弧線系意匠のもの (9.3~8) と、弧線のみのもの (10.1.2) に分かれる。9.6は器高が低い点や、沈線間の間隔が弱く、集線化の度合いの低さと同時に、単位文効果が弱い

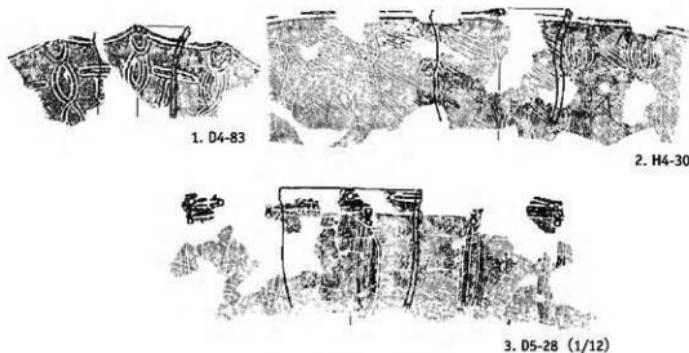


図13 武士遺跡B1群土器

点や、頸部無文帯での斜行意匠から勘案すると、関西的色彩を帶びている土器の可能性もあるう。

## (2) 武士B群

### 武士B1群 頸部に括れを有する土器群

#### I種 主文様が蕨手文の土器群

##### 1類 主文様のみの土器群 (11-1~4)

主文様が単位部（突起部）に施されるもの（11-3）と、単位部に施されないもの（11-2.4）がある。

##### 2類 主文様+副文様という構成を探る土器群 (11.5~12.1)

副文様が、H字状の意匠のもの（11-5）と、主文様とやや異なる意匠の蕨手文が施されるもの（10-6.7）に分かれる。また、厳密には蕨文様ではないが、主文様間に連携斜行沈線が充填されるもの（12-1）もある。このほか、便宜的に本類に含めた12-2は、頭部括れ部以上の施文域に意匠が施されない。

##### III種 主文様が渦巻文（J字文）系の土器群 (13-1~3)

13-1は二段渦巻文系譜の意匠で、頸部括れ部に横位に連携する区画文系の意匠が配される。13-2の意匠も多段渦巻文系譜で、主文様間を横位に連携する斜行文が施される。

#### IV種 主文様が懸垂文構成の土器群

##### 1類 主文様が懸垂文のみの土器群 (14-1~3)

主文様のみの上器（14-1）と、副文様が施される土器（14-2.3）に分けることができる。14-

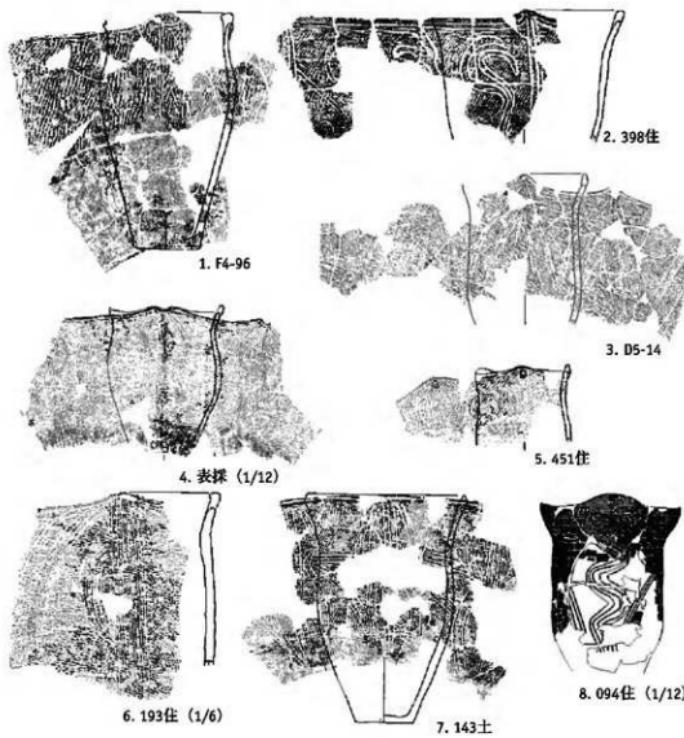


図14 武士遺跡B1群土器

2は一部に斜行文が認められ、蕨手文系譜と考えられる副文様の一部は、口縁下の沈線の延長上に描出される。

2類 主文様に弧線文が付着する土器群 (14-4~7)

IV種 主文様が匂字状の土器群 (15-1~7)

意匠内が無文のもの (15-1) とそうでないものに分けることができる。また、主に頭部の括れ部位で、主文様に横位方向の突出文があるもの (15-2.3.6) と、そうでないものに分けることができる。15-4は頭部の施文域には繩文が施されない。15-6は頭部の施文域の上半に繩文が

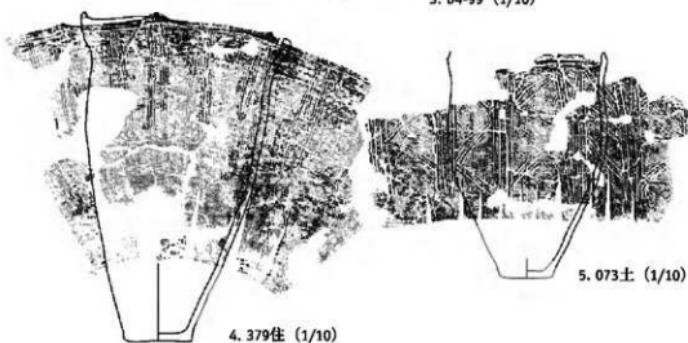
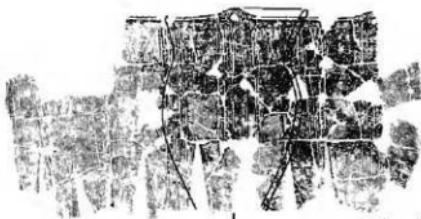


図15 武士遺跡B1群土器

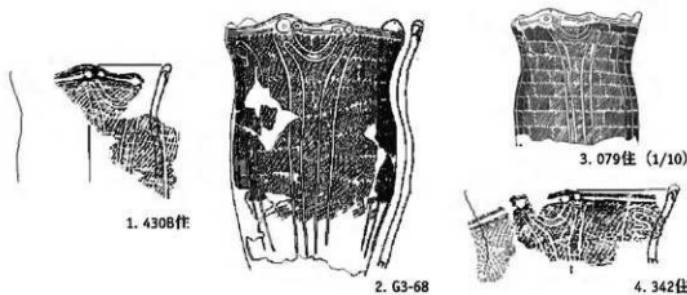


図16 武士遺跡B1群土器

施されない。15-6は厳密には3-7~9のような土器群との関連性が強いと考えられるが、器形を考慮しつつ便宜的に本群に含めた。15-7はH字状の意匠が集線文化し主文様間にも集合沈線効果を獲得したものとして捉えることも可能であろうが、これについては15-6、3-7~9のような土器群との関連も考えられよう。便宜的に本種に含めたものである。

#### V種 主文様がY字状の土器群 (16-1~4)

Y字状意匠という呼称方法は全く便宜的なものである。副文様に蕨手文の採用が顕著な土器群である。Y字状意匠の系譜については、3-7~9のような土器群の主文様の一層の懸垂文化の可能性もある。詳細にみると、意匠上端の丸みを帯びたV字状の意匠と懸垂文が一体となって描かれており(16-1.2.4)、渦巻文+懸垂文という主文様構成の形骸化として捉えることも可能であろうが、形骸化するにいたる時間幅を想定するほど、蕨手文自体に時間的経過を認める事はできない。なお、この、意匠上端の丸みを帯びたV字状の意匠と懸垂文の一体化が途切れたもの(14-3)もある。いずれの土器も、括れ部による施文域の分割と、主文様の上半部と下半部が対応する。

#### 武士B2群

##### I種 主文様が蕨手文の土器群 (17-1.2)

##### II種 主文様が大柄のJ字文系の土器群 (17-3.4)

17-4は器高が低く、厳密には本群に含み得ないものであろうが、便宜的に含めている。

##### III種 主文様が渦巻文系の土器群 (18-1~8)

渦巻文が独立しているもの(18-1~3)と、懸垂文間に概ね取り込まれて形骸化するもの(18-4~8)に分けることができる。主文様・副文様共に、渦巻文系譜の意匠を基本とする。18-7は器高が低く、厳密には本群に含み得ないものであろうが、便宜的に含めている。

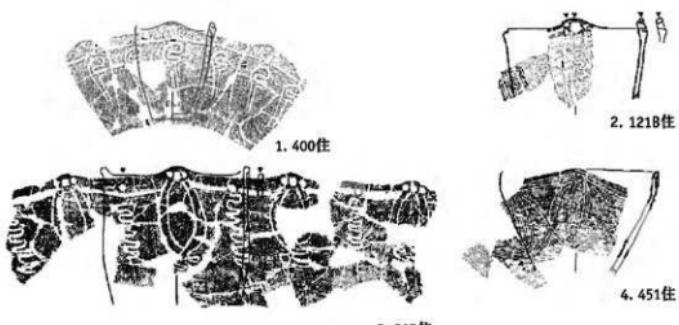


図17 武士遺跡B2群土器

#### IV種 主文様が懸垂文系の土器群

##### 1類 蛇行文系の土器群 (19-1~5)

蛇行文のみのもの (19-1) と、副文様部位に入組斜行文が採用されるもの (19-2.3.5) に分けることができる。19-2の蛇行文末端は、やや解放気味で、入組斜行文端部と密に接する。19-5は、形骸化した蛇行文が懸垂文内に取り込まれたようなもので、渦巻文が形骸化して懸垂文間に取り込まれるもの (18-4~9) に類似する様相である。

19-4は、本来副文様部位の入組斜行文が、懸垂文化して主文様部位に採用されたものであり、特異なものであろう。便宜的に本類に含めた。

##### 2類 懸垂文の土器群 (20-1~10・21-1.2)

副文様に蛇行文もしくは蕨手文が施されるもの (20-1.2) と、斜行文が施されるもの (20-3.9) と、副文様が施されないもの (20-10) に分けることができる。さらに、武士B1群III種2類同様の懸垂文両脇に弧状の意匠を施したもの (21-1.2) もある。21-3は便宜的に本類に含めたもので、例えば3-9のような上器群が集線文化したものであろう。

#### (3) 武士C群

##### 武士C1群 主文様部位に垂下藤帯を有さない土器群

##### I種 主文様が蕨手文の土器群 (22-1~4)

主文様末端を横位に開放し、横方向の区画文とするもの (22-1) と、そうでないもの (22-2~4) に分けることができる。副文様部位に斜行文系意匠が施される趨勢 (22-1.2.4) を示す。

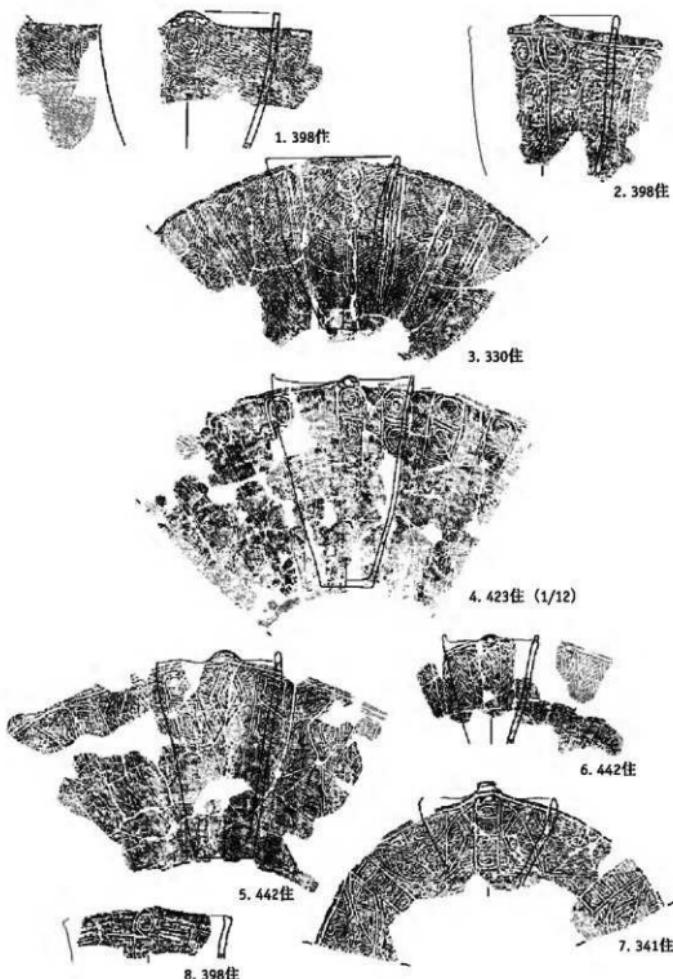


図18 武士遺跡B2群土器

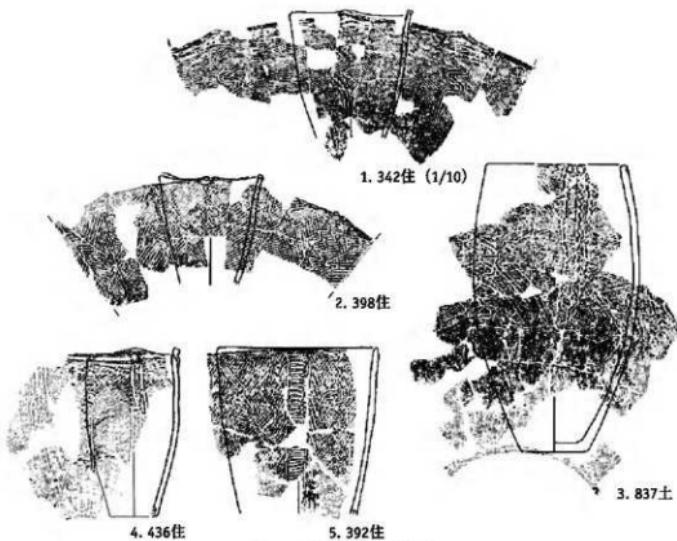


図19 武士遺跡B2群土器

#### II種 主文様が蛇行文の土器群 (22-5~10)

主文様末端を横位に開放し、横方向の区画文とするもの (22-6) がある。

#### III種 主文様がJ字文系の土器群 (23-1~3)

23-1は、副文様に蕨手文が施され、さらに、副文様と主文様間に入組文が施される。23-2.3はJ字文系譜であるとともに、縦位に懸垂下した入組文系譜の意匠である可能性もある。しかしながら、入組文自体を主文様とする一群 (23-12~14) の存在も注意しておかなければならない。

#### IV種 主文様が渦巻文系の土器群 (23-4~9)

副文様に蛇行文系意匠を施すもの (23-4.5.7) と、入組文系意匠を施すもの (23-6.9) に分けることができ、前者の方がやや古相を呈する。

#### V種 主文様が入組文の土器群 (23-10~14)

懸垂状の蛇行文系の入組文を施すもの (23-10.11) と、横位方向のまま主文様となるもの (23-12.13.14) がある。

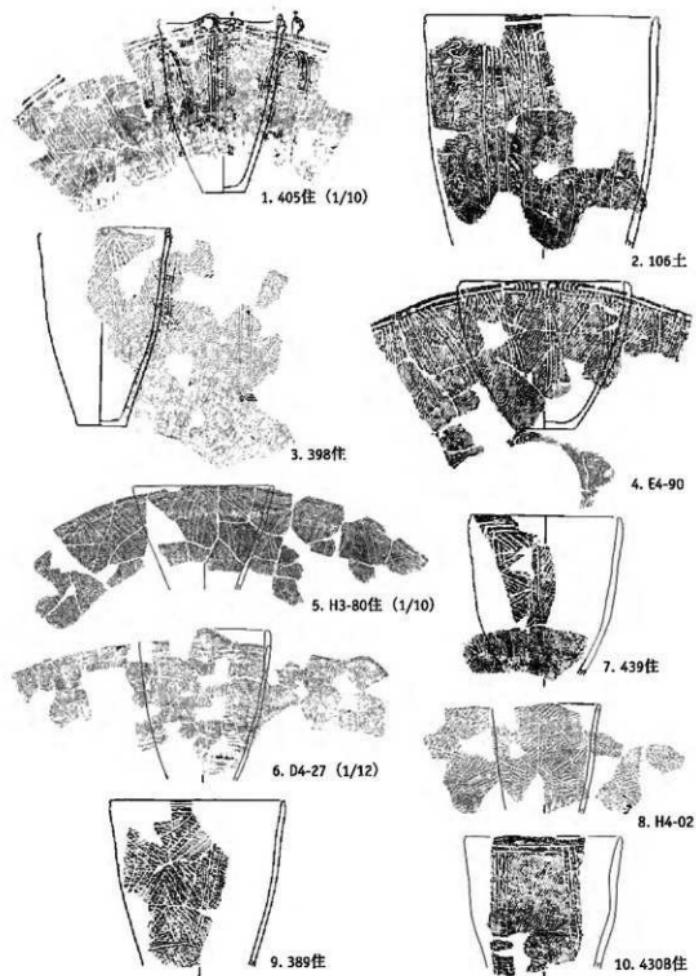


図20 武士遺跡B2群土器

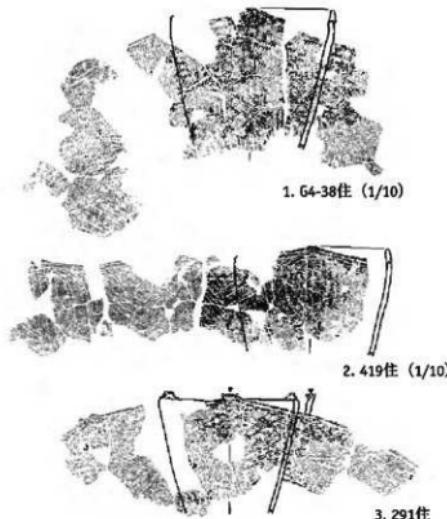


図21 武士造跡B2群土器

VI種 主文様が懸垂文構成の土器群 (24-1~9)

副文様に蕨手文を施すもの (24-1~3) と、蛇行文を施すもの (24-4.5) と、入組文を施すもの (24-6~9) に分けることができる。

24-1は主文様・副文様末端を横位に開放し、横方向の区画文効果を有するものであるが、22-1のような主文様部位の下端に小渦巻文もしくは入組文を有さない。

VII種 主文様が弧状意匠の土器群 (25-1~5・26-1.2)

主文様自体が弧状のもの (25-1~5) と、懸垂文両脇に弧状意匠が付着するもの (26-1.2) に分けることができる。

25-1は主文様末端を横位に開放する。25-3は主文様がH字状の意匠であるが、全く便宜的に本種に含めた。B 1群のみに特徴的な意匠であり、異質な土器である。

VIII種 主文様が三角文の土器群 (27-1~3)

武士C 2群 主文様部位に垂下降帯を有する土器群

I種 垂下降帯が1本の土器群

1類 副文様が入組文の土器群 (28-1~6)

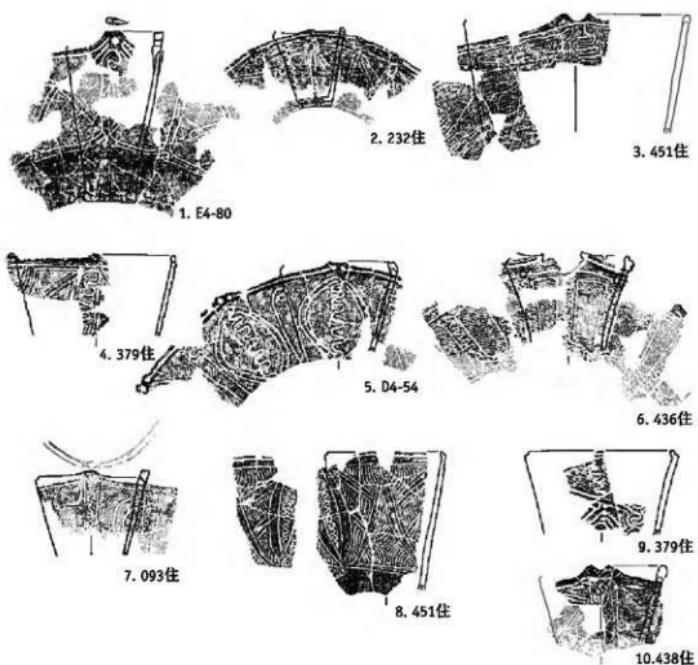


図22 武士遺跡C1群土器

- 2類 副文様が斜行文の土器 (28-7)
- 3類 副文様が弧状の土器群 (28-8, 10, 11)
- II種 垂下隆帯が2本の土器群
- 1類 副文様が蕨手文の土器群 (29-1)
- 2類 副文様が渦巻文の土器群 (29-2, 3)
- 3類 副文様が弧状の土器群 (29-4)
- III種 2本の垂下隆帯が交差する土器群 (30-1, 2)

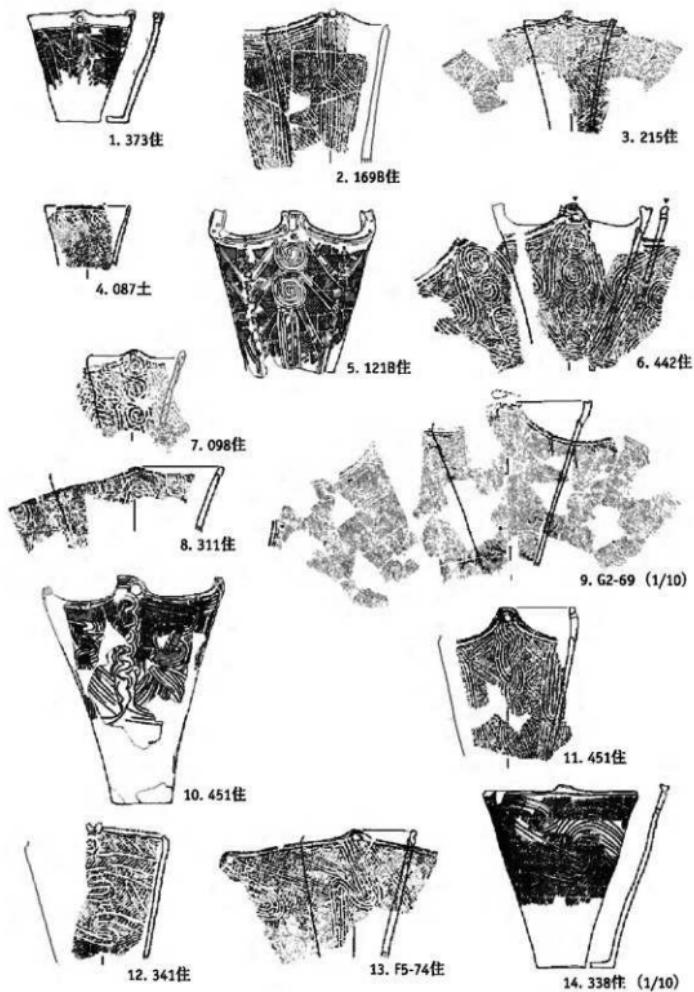


図23 武士遺跡C1群土器

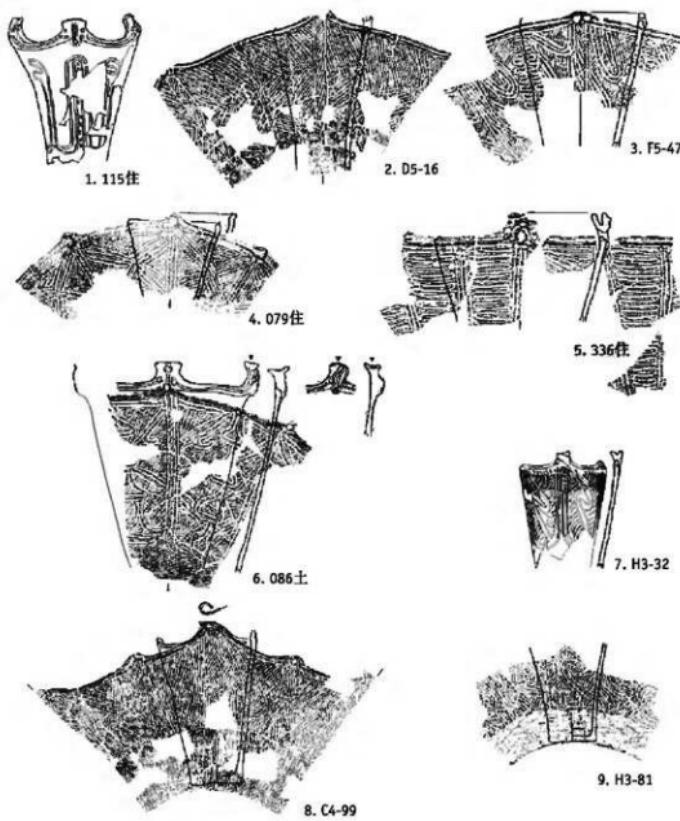


図24 武士遺跡C1群土器

(4) 武士D群

I種 滴巻文を主文様とする土器群

1類 下端の横位区画が明瞭な土器群 (31-1~3)

2類 下端の横位区画が明瞭でない土器群 (31-4~8)

## II種 懸垂文を主文様とする土器群 (31-9~11)

### (5) 武士 E 群 (32-1~4)

胎土・焼成から判断して、本群に含み得る破片資料はあるが、完形土器・復元実測土器に限定すれば、堀之内2式期の土器を含めて、4個体のみである。

### (6) 武士 F 群 (32-5, 6)

#### 4. 個体別系統分析の実例

##### (1) 武士 A 群

###### 武士 A 群 I 種 (1-1~4-4)

蕨手文を主文様とする土器については、蕨文様に採用される意匠は蕨手文に限定されるという特徴を有している。主文様相互の横位連携を図る斜行文や、主文様間の空隙を埋めるべく充填された懸垂文系の斜行文は、主文様系譜の明確な意匠であるとは言い難い。むしろ集合沈線化や、単位文間への沈線充填化のながれのなかで獲得されたと捉えられる。と同時に、武士 D 群とした土器に見られる斜行文や、石井氏の B 群の特徴ともいべき斜行文の採用・相互影響のもとに獲得されたと考えるべきであろう。

また、他群に散見される、意匠末端を横位に解放し、意匠末端での主文様相互の連携を深めるような土器が認められない点も指摘できるが、これは対象となる土器数が少ないので考慮しなければならないのかもしれない。しかし、詳細は後述するが、意匠末端の開放が武士 D 群からの影響である点を考慮するならば、本種は、他群からの文様構成にかかる影響が希薄であ

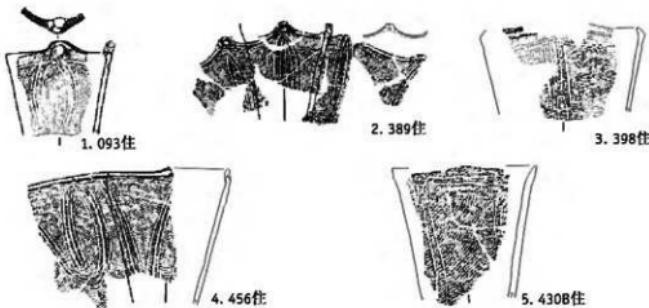


図25 武士遺跡C1群土器

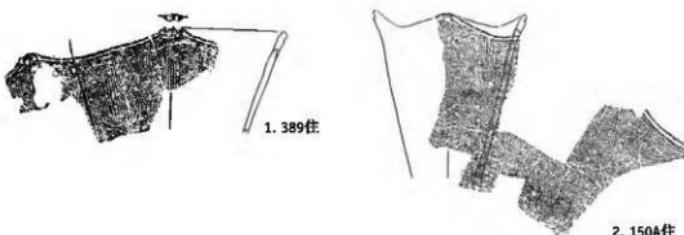


図26 武士遺跡C1群土器

るという一貫した武士A群I種性の堅持という特徴を有しており、その点からは、意匠末端を開放する土器が認められないという点は、単純に個体数の少なさに起因するものではないのかかもしれない。

3-7.8は口縁部のV字状の意匠と胸部の麻手文が痕着した土器で、主文様部位で頸部括れ部に施される横位の区画文が途切れる。頸部括れ部の横位の区画文をまたぐかたちで主文様が施される点、すなわち施文域と意匠に齟齬が認められる点や、本来は無文である口縁部にまで縄文が施されている点を勘案すれば、後述の武士B1群との中間的な土器群であると捉えることができよう。3-9は、主文様と副文様の頸部の括れ部位に、横位方向の突出意匠が認められ、3-7.8に認められた主文様間の横位の区画文が一層形骸化したもの（武士B群化したもの）とも捉えることもできよう。

主文様が、単位部に施されるものと施されないものの差異については、後述する武士B1群I種1類にも認められる傾向であり、これについては、やはり後述する石井氏のA群（武士E群）の下北原式土器にみられる、単位部と主文様部位の希薄な関係（口縁部に単位部自体が存在しない土器や、単位文の認識が困難な土器）からの影響の有無を示しているのかもしれない。

なお、麻手文末端が閉じ意匠内が無文となる古段階の土器が乏しい点については、武士遺跡においては当該段階での集落設営が希薄であることに起因するものであろう。

#### 武士A群II種1類（5-1～7）

本類は、後述の武士D群との「影響関係が顕在化し、分類に苦慮する事例がかなりの数存在するようになる」、すなわち「中間的な土器をも生み出す」（石井1993）と指摘するように、武士A群と武士D群のどちらに編入すべきか苦慮した土器群に相当する。本群に含めた理由は、全く便宜的なものである。

大局的には、武士A群的な器形と、武士D群的な斜行文が特徴的であり、武士D群的な渦巻文の懸垂文化（武士A群化）によりJ字文化したとも捉えることもできよう。しかし最大の特

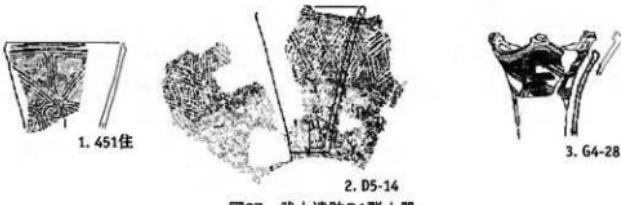


図27 武士遺跡C1群土器

概は、本来的に武士D群には施されることのない、庶手文・蛇行文といった武士A群I種や後述する武士B群I種の主文様・副文様を、本類の副文様として採用している点であり、石井編年の第2段階以降～第3段階を中心とする時期以降での、本種と武士D群との融合を見て取ることができよう。

ともあれ、本種は多くの先学により、下総地域では少なく神奈川方面では一般的であるとされる武士D群I種と密接な関係を有する上器群である。しかしながら、下総地域では、武士D群I種としたすべての土器群が、本種に表象するような融合によって系譜が絶たれることはなく、神奈川方面との同一の変遷をたどる土器が、第4段階程度までは明らかに存在することから、遺跡毎や小地域毎の微細な差異が将来的には問われることとなろう。

#### 武士A群II種2類（6-1～4）

6-3に見られるような主文様の末端を解放する土器は、後述する武士C1群にも散見される（22-1・24-1など）。現段階では、末端を解放し横位の連携を図る、もしくは肩過半での横位区画文の獲得を目指す上器（要素）の系譜は明瞭ではない。古段階から明確に肩下半で区画文を有する土器は武士D群であることから、先述の、武士A群II種1類における武士D群との融合という様相を鑑みるならば、本類における末端を解放し横位の連携を図る、もしくは肩下半での横位区画文の獲得を目指す様相は、武士D群の影響もしくは武士D群的要素の残存とも捉え得るものである。同時に、武士C群の22-1のような土器に看られる東北的色彩からの影響も考慮しなければならないであろう。

また懸垂文効果の強い庶手文が、主文様の横位の連携を阻害する点や、括れ部の横位の区画文をまたぐ特徴（6-3）は、庶手文を主文様とする土器のうち、特に、器形により示される施文域をまたぐかたちで意匠（庶手文）が施される武士B1群の強い影響（例えば11-1～4）を見て取れるものなのかもしれない。

#### 武士A群III種1類（7-1～7）

本類も、武士A群II種1類同様、後述の武士D群との「影響関係が顕在化し、分類に苦慮する事例がかなりの数存在するようになる」、すなわち「中間的な土器をも生み出す」（石井

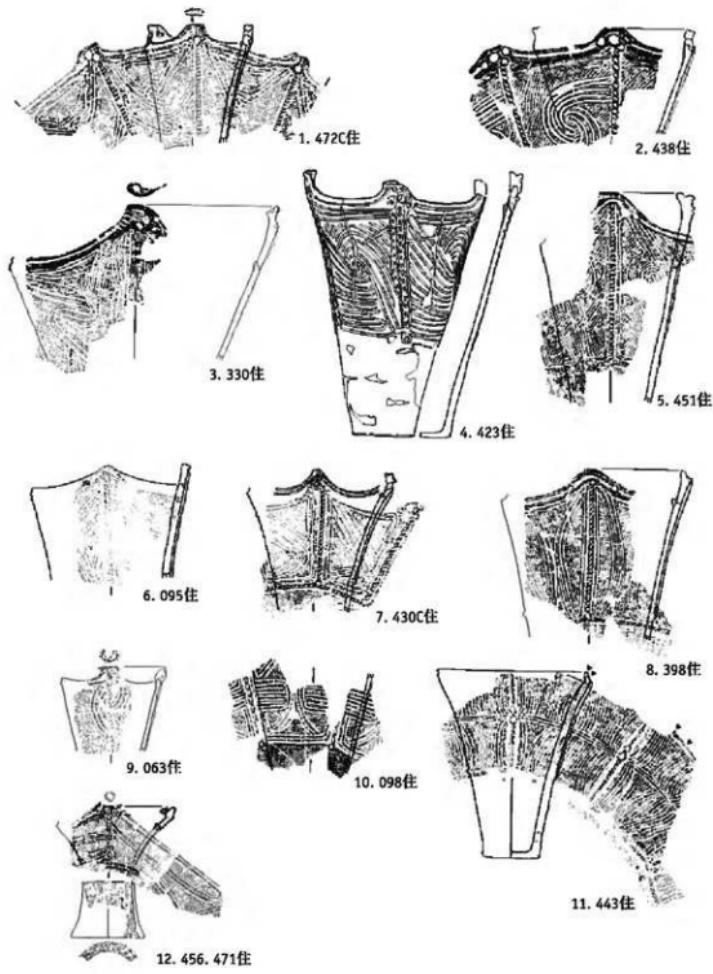


図28 武士遺跡C2群土器

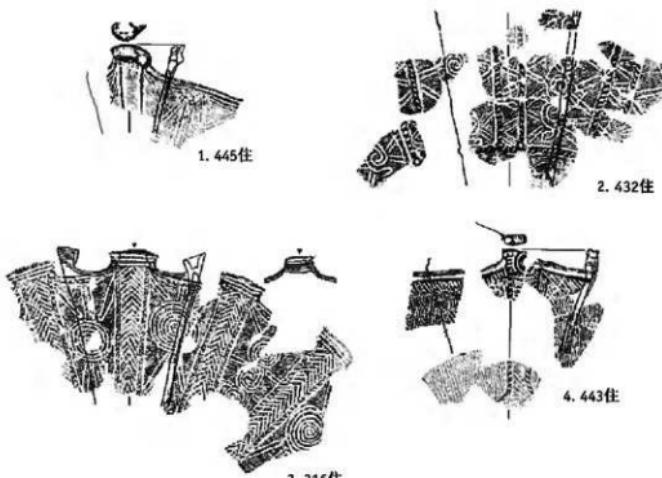


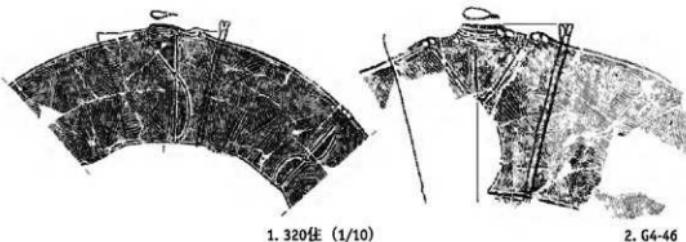
図29 武士遺跡C2群土器

1993)と指摘するように、武士A群と武士D群のどちらに編入すべきか苦慮した土器群に相当する。本群に含めた理由は、全く便宜的なものである。

武士A群II種1類同様、大局的には、武士A群的な器形と、武士D群的な斜行連携沈線が特徴的である。ただし武士A群II種1類に比して、渦巻文系意匠下半に付着する意匠への蛇行文系意匠の採用が目立つようと思われる。

本類においては、堀之内1式土器文様変遷史の趨勢を示す縦位懸垂文化のながれのなかで、主文様が懸垂文化する。おそらくそのながれのなかで、J字状意匠や渦巻文系の主文様は、蕨手文系意匠との接触により、意匠下半に側先状の意匠を獲得したり、主文様そのものを縦位に多段化（主に二段）させるものと思われる。ただしこの多段化は、主に渦巻文系意匠においては、主文様付近に付着する小渦巻文との関連（7-1）などによる場合もあるので、一概には断定できない。

ともあれ、懸垂文化のながれのなかで、主文様下端に向かう斜行連携文は、主文様下端方向への依存を目指しつつ（7-4）も、そこからから脱却し（7-3）、完全に形骸化（7-6）することとなる。武士D群の武士A群化ともいいくべきながれである。理論上想定しうる武士A群の武士D群化について、例えば、武士A群的な器形の主文様に蕨手文が施され、蕨手文末端が横位に



1. 320住 (1/10)

2. G4-46

図30 武士遺跡C2群土器

開放し、主文様の末端相互が連携し、区画文化するような土器の類例に欠けることは、両群の相互影響の度合いを示すものとして、注意しておかなければならないのかもしれない。

主文様の渦巻文と斜位の連携沈線が癒着し、これら胴部上半での意匠との依存度が希薄な横位区画文が胴部中位に施されるもの（7-7）については、主文様の懸垂文化がなされないという点においては、武士D群の色彩を色濃く残しているものとも捉えられよう。また、7-5の頸部無文帯に施される意匠は、胴部に施される渦巻文系意匠に類似する。当該部位に陸帯によるJ字状意匠が施される例もあるので断定はできないが、文様帯と意匠施文部位に齟齬が生じている土器である可能性もある。

#### 武士A群Ⅲ種2類（7-8.9）

主文様の多段化や、副文様としての蛇行文系意匠の獲得（7-8）を併せれば、武士D群の色彩から完全に脱却し、まさに武士A群化した土器群であると捉え得る。

#### 武士A群Ⅲ種3類（8-1~11）

主文様の集線文化や、末端の開放化のながれのなかで単位文効果が減少してゆく土器である。注意すべきは、主文様間に斜行文を獲得した上器（8-11）については、主文様である懸垂文末端の解放に歛止めがかかり、単位文効果の減少が若干食い止められていることにも注意すべきであろう。この斜行文自体の系譜が、武士D群とした土器に見られる斜行文や、石井氏のB群の特徴ともいいくべき斜行文の採用・相互影響のもとに獲得されたと考えるならば、異群との融合・接触を示す土器と、そうでない土器との消長の差を示す可能性があるものとして興味深い。

#### （2）武士B群

##### 武士B1群Ⅰ種1類（11-1~4）

主文様が、単位部に施されるものと施されないものの差異については、先述の武士A群Ⅰ種1類にも認められた傾向であり、これについても、下北原式土器にみられる単位部と主文様部

位の希薄な関係からの影響の度合いを示しているのかもしれない。同時に、先述の武士A群Ⅰ種1類にもあてはまる可能性もあるが、主文様と副文様という構成を探らず、副文様部位にも主文様を施し、主文様を繰り返し施すという特徴は、武士F群（石井氏のB群とされる「複数沈線により懸垂文を表現し、それを斜位に連絡する斜行文を組み合わせる一群」（石井1993））の特徴でもあることから、当該土器群との影響関係も考えられるのかもしれない。

#### 武士B 1群Ⅰ種2類（11-5～12-1）

11-5は、厳密には、幅狭ながら頸部無文帯を有していることから武士A群的であるが、口縁端部の文様帶の様相や、副文様の匁字状の意匠が横位区画文をまたぐかたちで施され、施文域と意匠の関係に齟齬が認められることから、本類に編入したものである。武士遺跡において副文様に匁字状意匠が施される稀有名例である。匁字状の意匠の系譜については、さまざまなる可能性が考えられる。具体的には、下北原式土器からの系譜や、3-7～9のような土器群からの系譜、さらには本来的に匁字状の意匠が存在していた可能性（15-1.2など）もあり、判然としないが、匁字状の意匠は武士B 1群に限定的に採用される意匠であることに注目しておきたい。

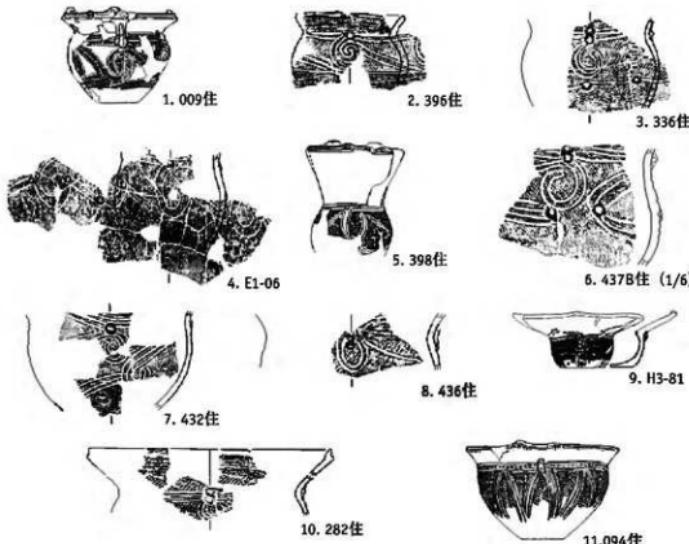


図31 武士遺跡D群土器

#### 武士B 1群Ⅱ種（13-1～3）

13-1は頸部括れ部に横位に連携する区画文系の意匠が配され、主文様上端の意匠も、武士A群の頸部無文帯に施されている意匠に類似することから、武士A群の影響を看取することができる。しかし武士B群に特徴的な口縁直下までの縄文が施されている。13-2の斜行文は、石井氏のB群（武士F群）からの影響であろう。石井氏のB群に相当する斜行文を特徴とする土器群の本遺跡（下総地域）での希少性と、本遺跡（下総地域）における主文様間へ斜行連携文の多用は、数量的に劣勢な土器群の要素が頻出し易いという捉え方もできるではなかろうか。

13-3は典型的なJ字文であるが、このような例は武士B群には欠ける。このことが、武士B群の特質を示しているものなのか、武士B群自体が古段階での例に欠ける故のものなのかはわからない。

#### 武士B 1群Ⅲ種 2類（14-4～7）

14-7は、再三述べるように、武士A群的な、頸部括れ部の区画文を有しながらも、口縁直下まで縄文が施されており、13-1と同様に武士A群的である。しかし、主文様間に施される斜行文は、頸部括れ部以下の施文域に限定されることから、13-1に比べれば、武士A群の色彩が強いものとも考えられよう。

#### 武士B 1群Ⅳ種（15-1～7）

H字状文の系譜については、先述の通りさまざまな可能性が考えられる。具体的には、下北原式土器からの系譜や、13-2・16-1～4のような土器群からの系譜、さらには本来的にH字状の意匠が存在していた可能性（15-1,2など）もあり、判然としない。最大の特徴としては、15-6を除けば、副文様として他の意匠を採用することが希薄であるという点である。15-5の副文様部位の斜行文は、武士F群（石井氏のB群）系譜の効果であり、意匠と捉えるには躊躇がある。ともあれ、本種は、副文様に他の意匠を採用することが希薄であり、主文様のみ（15-1,2）であるか、副文様の部位にも主文様を繰り返すもの（15-3,4）のみになる。15-7はII字状の意匠が集線文化し、主文様間に集合沈線効果を獲得したものとして捉えることも可能であろうが、これについては15-6、3-7～9のような土器群との関連性も考えられよう。便宜的に本種に含めたものである。

純粹なH字状の意匠を主文様とする土器は、他の意匠を副文様として採用することなく、また、明確に集線文化をしていくような土器を生み出すことなく消滅していくことは、本種の独自性の高さと、通時的な系統性が希薄であることを示しているのかもしれない。同時に、異主文様を有する土器で、副文様としてH字状の意匠が採用される土器が、本遺跡では11-5のみである点も注目されよう。なお、15-4に認められる頸部施文域で縄文が施されない様相は、武士A群の影響であると考えられよう。

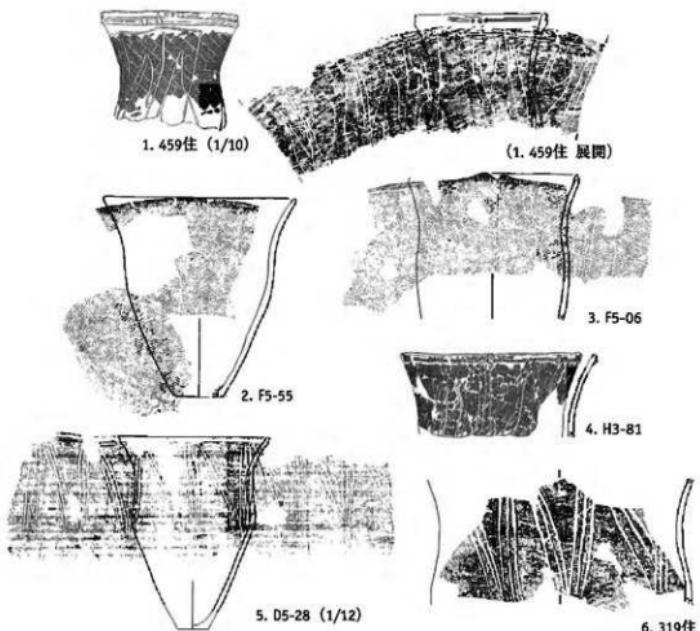


図32 武士遺跡E・F群土器

#### 武士B 1群V種 (16-1~4)

本種は、他遺跡において同種の類例が希薄な土器群である。また、副文様への蕨手文の採用が顕著である。本種の主文様の系譜を、渦巻文+懸垂文という主文様構成の形骸化と想定した場合、そのような土器群（武士A群Ⅲ種3種など）では、副文様への蕨手文の採用は希薄であり、むしろ蛇行文との関連が強いようである。しかし、蛇行文の系譜の一部を蕨手文に求めたところでも、本種の説明に関わる主文様と副文様の時間的な齟齬は埋めがたく、整然と説明するに至らない。

#### 武士B 2群Ⅲ種 (18-1~8)

18-8は、肩上部の横位の区画文をまたぐかたちで、形骸化した渦巻文を取り入れた懸垂文が施されている。懸垂文が口縁直下から施されている点からは、武士B群的であるが、横位の区

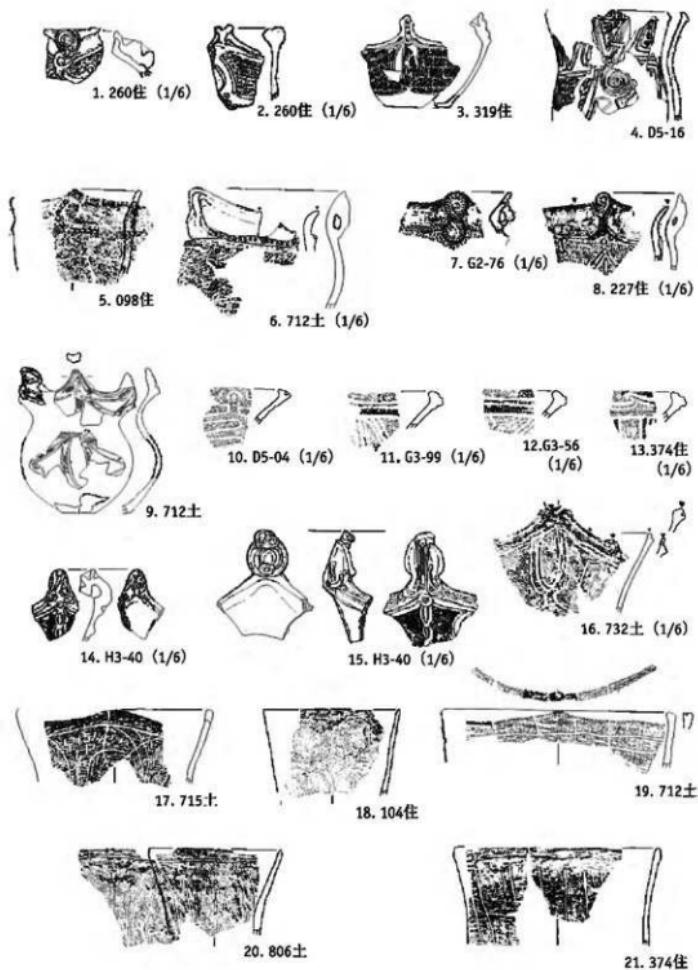


図33 武士遺跡その他の土器群

画文の存在は武士A群的であり、この土器に限って、縦手文の副文様が採用されていることは、注意される。本種は、主・副文様共に、渦巻文系譜の意匠が原則のようであり、18-6の副文様部は、斜行連携文もしくは斜行充填文であり、個別の意匠とは捉えがたいものである。ともあれ、本種にあっては、18-8の副文様が主文様と異なる点や、横位の区画文が描出されている点は、土器の系譜を考えるうえで興味深い。

#### 武士B 2群IV種1類 (19-1~5)

入組斜行文を視座に据えると、竪行文と入組斜行文の関係は強いものと捉えられる。19-3の斜行文は、下裁竹管によるものであり、形骸化が進行しており、本来的には入組斜行文であった可能性もある。

#### 武士B 2群IV種2類 (20-1~10・21-1.2)

本類は、おむね斜行文との関連が強い土器群である。懸垂文は本類に限らず、堀之内1式土器の変遷の趨勢である縱位懸垂化のながれのなかで、単位文・意匠としての役割が、縱位の区画文に移行する、もしくは縱位の区画文として獲得されることが指摘される。一方、本類の斜行文の系譜というものが、武士D群系譜・武士F群系譜・人組文の形骸化したもののはずであろうとも、これらは単位文として主文様・副文様とはなり得ないものである。

このように考えるならば、本類の主文様（懸垂文）および副文様部位の斜行文は、堀之内1式期新段階では、独自の系統性を誇示し続けることが困難となり、入れ替わるように、墳俗系懸垂文を有し、副文様に斜行文もしくは入組文を有する武士C 2群が盛行することは示唆的である。このことは、武士A群IV種や武士B 1群IV種の消長についても指摘できるところであろう。

### (3) 武士C群

#### 武士C 1群I種 (22-1~4)

22-1は主文様末端を横位に開放し、横方向の区画文とするものであり、主文様部位の下端に小渦巻文もしくは入組文を有し、東北的色彩の強い土器であると捉えることができよう。堀之内1式期に散見される、主文様下端を横位に開放する土器の系譜に、東北的要素を考慮に入るべき要因を示す土器であろう。

#### 武士C 1群II種 (22-5~10)

22-6.8は、22-1同様、主文様末端を横位に開放し、横方向の区画文とするものであり、主文様部位の下端に小渦巻文もしくは入り組み文を有し、東北的色彩の強い土器であると捉えることができよう。22-8は、22-1.6とは時間的な隔たりがあるものの、このような東北的色彩の強い土器群は量的には乏しいながら堀之内1式期において、その系譜が続いている可能性を示している土器なのかもしれない。

#### (4) 武士 E 群 (32-1~4)

いずれの土器も縄文が施されている点は下総台地的であると判断されよう。32-1は、懸垂文が斜め方向に流れているが、この様相が、形態化であるのか他群からの影響であるのかは判断できない。神奈川方面の当該土器群は、口縁端部の文様帯下に、若干の無文部を挟んだり、無文部下に明確な横位区画文を施す例があるが、そのような例に対応するように、32-1も、一部途切れるものの、横位の区画文が施されると同時に、当該部位以上には縄文が施されることはない。

本群は称名寺式系譜の土器群であり、神奈川方面での連続性が顕著で、下北原式土器と呼称されるものである。下総方面の称名寺式末期（所謂第7段階（石井1992））の上器群は33-17~19に示したような、文様構成が崩壊した土器群が趨勢（加納2000c）であり、これらの土器群のうち、明確に堀之内1式期に伴うものは現段階では稀少である。33-21は本群に含み得るところもあるが、口縁端部の形態化を勘案したところで、本群には含めなかった。

## 5. 小結

本稿では、市原市武士遺跡出土の堀之内1式土器の分類と解説、さらにはそこに表象する各群の土器の相互影響関係について、同一性・差異性という視点から、各個体もしくは個体群の特質を示してきた。主に武士A・B・C群を中心とした分析であるが、一遺跡における土器群の系譜関係の複雑な様相については示し得たものと思われる。また、地域性の再確認や、一遺跡内ののみの特徴である可能性の高い様相、さらには一個体の土器に顯れる複雑な系譜関係を暗示することができたものと考えられる。

筆者は、武士遺跡の中期終末～後期中葉にいたる集落の変遷について、社会変遷史的な意味合いを込めて、そのアウトラインを示し（加納2000a）、そのうち中期終末に関する様相については既に発表している（2000b）。縄文時代の社会変遷史上の画期となる後期中葉に関する詳細については未だ手つかずの状態ではあるが、後期前半堀之内1式段階における様相把握に向けては、既にその一部は柄鏡形住居跡の柱穴の深度とその位置からの類型化の作業を示している（加納2001）。本稿は、この（加納2001）と対になるべき性格の基礎的操作の論考であり、住居跡の系譜関係と土器群の系譜関係を睨んだところでの、後期前半の社会変遷史上の意義についての論考を目指んでいる。ここに小結として筆を置く所以でもある。

## 〈参考・引用文献〉

- 石井 寛 1982 「5. 南関東西南部」『シンポジウム堀之内式土器資料集』 市立市川考古博物館  
石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究（予察）」『調査研究集録』 第5号 港北ニュータウン埋蔵文化財調査團  
石井 寛 1990 「山田大塚遺跡」 横浜市埋蔵文化財センター

- 石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 (財)横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1993 「堀之内1式期上器群に関する問題」「牛ヶ谷遺跡・華藏台南遺跡」 (財)横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1995 「川和向原遺跡・原出口遺跡」 (財)横浜市ふるさと歴史財団
- 種田孝司 1972 「縄文式土器文様発達史・素描 (上)」『考古学研究』第18巻第4号 考古学研究会
- 種田孝司 1975 「2 原始社会の日本の特質」「日本史を学ぶ!」有斐閣
- 稻村晃嗣 1988 「鵠ノ巣貝塚出土の縄文時代後期初頭の土器群 (補遺)」「村上徵君追悼論文集」村上徵君追悼論文集編集委員会
- 稻村晃嗣 1989 「鵠ノ巣貝塚出土の縄文時代後期初頭の土器群」「考古学の世界」慶應義塾大学民族考古学研究室
- 押山雄三 2002 「東北地方南部における縄文後期前葉の上器」「後期前半の再検討」縄文セミナーの会
- 企子優子 2002 「奥三面における後期前半の土器様相」「後期前半の再検討」縄文セミナーの会
- 加納 実 1990 「千葉県における縄紋後期前半土器型式研究の課題」「縄文後期の諸問題」縄文セミナーの会
- 加納 実 1994 「縄文時代後期・関西系土器群の新例」「研究速報誌」第39号 (財)千葉県文化財センター
- 加納 実 1995 「下総台地における加曾利Ⅲ式期の諸問題 - 集落の成立に関する考察を中心に - 」『研究紀要』16 (財)千葉県文化財センター
- 加納 実 1998 「市原市武士遺跡2」 (財)千葉県文化財センター
- 加納 実 2000 a 「集合的居住の崩壊と再編成 - 縄文中・後期集落への接近方法 - 」「先史考古学論集 第9集」
- 加納 実 2000 b 「土器型式編年論 後期」「縄文時代』11 縄文時代文化研究会
- 加納 実 2000 c 「武士遺跡出土の関西系土器群の再評価」「貝塚博物館紀要』第27号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 加納 実 2001 「柄鏡形住居跡分析の一観点 - 縄文時代後期前半集落の解明にむけて - 」「土曜考古学研究会 第25号 土曜考古学研究会
- 加納 実 2002 a 「非居住域への分散居住が示す社会 - 中期終末の下総台地 - 」「縄文社会論 (上)」同成社
- 加納 実 2002 b 「南関東における堀之内式上器の様相」「後期前半の再検討」縄文セミナーの会
- 木下哲夫 2002 「北陸・飛騨に於ける縄文後期前半の土器 - 気屋式上器とその周辺 - 」「後期前半の再検討」縄文セミナーの会
- 品田高志 2002 「新潟県における縄文後期前葉期の土器群 -柏崎市十三本塚北遺跡を中心にして-」「後期前半の再検討」縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 1982 「3. 南関東東部」「シンポジウム堀之内式土器資料集」市立市川考古博物館
- 鈴木徳雄 1984 「関東西部における縄文後期前半の土器様相」「王子台遺跡とその周辺」東海大学文化部連合考古学研究会
- 鈴木徳雄 1988 「中野台貝塚」「東葛上代文化の研究」古宮・下津谷岡先生還暦記念祝賀事業実行委員会
- 鈴木徳雄 1990 a 「称名寺式土器」「調査研究集録』第7冊 横浜市郷土文化財センター
- 鈴木徳雄 1990 b 「称名寺・堀之内1式研究の諸問題」「縄文後期の諸問題」縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 1991 「称名寺式の変化と文様帶の系統」「土曜考古」第16号 土曜考古学研究会

- 鈴木徳雄 1992 「縄紋後期注口土器の成立」『縄文時代』3 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1993 「称名寺式の変化と中津式」『縄文時代』4 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1994 「称名寺式の形制と施文域－文様構成の地域的伝統と型式変化－」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4
- 鈴木徳雄 1995 a 「称名寺式の文様施文過程と伝統－文様描線の対応と結合方式－」『縄文時代』第6号 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1995 b 「称名寺式における充填列点紋の成立－文様統合方式の複合と変容過程－」『群馬考古学手帳』5 群馬土器観会
- 鈴木徳雄 1999 「称名寺式間沢類型の後裔－堀之内1式期における小仙塚類型群の形成－」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 2000 「称名寺式終末期と装飾帯の変化－所謂「1文様帯」の形成と堀之内1式－」『群馬考古学手帳』10 群馬土器観会
- 鈴木徳雄 2002 「北関東における堀之内式の様相－地域的様相と“類型”的構成－」『後期前半の再検討』縄文セミナーの会
- 田中耕作 2002 「新潟県における縄文時後期前葉の土器群」『後期前半の再検討』縄文セミナーの会
- 綿田弘実 2002 「長野県の後期前葉土器群Ⅱ」『後期前半の再検討』縄文セミナーの会